

英文學評論

第 XXXIII 集

- 『批評論』注解 (一) 酒 井 幸 三
- 混沌の夜への眼差し 三 宅 卓 雄
——「親戚モリヌー少佐」のディスタール——
(ホーソーン短篇論 2)
- 『ジーキル博士とハイド氏』解釈 竹 森 修
- ヘミングウェイの中国ルポ 鳴 原 真 一

京都大学教養部英語教室

目次

『批評論』注解(一)……………	酒井幸三…(一)
混沌の夜への眼差し……………	三宅卓雄…(三)
——「親戚モリヌー少佐」のディスクリール—— (ホーソーン短篇論2)	
『ジークル博士とハイド氏』解釈……………	竹森修…(五)
ヘミングウェイの中国ルポ……………	鳴原真一…(一五)

編集後記

☆ 『英文学評論』第三十三集をおとどけする。今年度も年二回発行の予定で用意をしていたのであるが、本号の編集をほぼ終えた時点で教室予算が決まり、前年度に比べて大幅な削減という結果になったため、今年度の第二号は、予算上、発行できない公算が大きくなった。第二号に執筆予定の諸氏の原稿をできるだけ待って、一篇でも繰り入れたいという望みも、予算と時間とのかねあい上、無理かと思われたので、それら予定の方々の御寛容を得て、本号は当初の計画どおりの形で出す運びとなった。

☆ 本号に寄せられた四篇——ポウプ、ホーソン、スチーヴンソン、ヘミングウェイに関する各論考——に目をおとしているうちに、これらの四篇が、いずれも、それぞれ何らかの意味で、人間存在の(内的・外的)秩序という古来・不朽の問題にふれていて、そういう意味で、四篇のあいだに期せずしておおらかな暗黙の統一が与えられているように思われたことは、望外の喜びであった。

☆ 教室談話会は、四月十九日に六反田氏の「ダンテと英文学」という話題をめぐって、また、六月二十七日には「英語教育の在り方について」、三宅、佐野、田中、安藤、大浦の諸氏の談話をめぐって、おこなわれた。

☆ 青木啓治氏は昨年十一月に教授に昇任された。また、豊田昌倫氏はロンドン大学に一年間の予定で留学のため昨年九月半ばに出発された。一方、過去六年間にわたって専任の外国人教師であったジョン・ヌーン氏は同じく九月末に帰英の途につかれ、十一月初めから(この三月末までの任期で)ベラス、ステファンの両女史がそれぞれ非常勤講師として出講されている。なお、昭和三十一年に停年退官された教室の先達、小林象三先生は昨年六月十四日に逝去された。先生の真摯なお人柄を偲びつつ心から御冥福をお祈り申し上げます。

(編集委員)

英文学評論 第三十三集

非 売 品

昭和五十年二月二十日 印刷
昭和五十年二月二十八日 発行

編集者 京都大学教養部英語教室

代表者 佐々部英男

印刷所 内外印刷株式会社

京都市下京区西洞院七条南

発行所 京都大学教養部英語教室

京都市左京区吉田二本松町

REVIEW OF ENGLISH LITERATURE

Volume XXXIII February 1975

CONTENTS

- A Commentary on *An Essay on Criticism* (1)*Kôzô Sakai*
- The Descriptive Structure of "My Kinsman,
Major Molineux"*Takuo Miyake*
—Studies on Hawthorne's Tales (2)
- An Interpretation of *The Strange Case of Dr. Jekyll
and Mr. Hyde**Osamu Takemori*
- Hemingway on China*Shinichi Shigihara*
-

ENGLISH DEPARTMENT
COLLEGE OF LIBERAL ARTS
KYOTO UNIVERSITY